

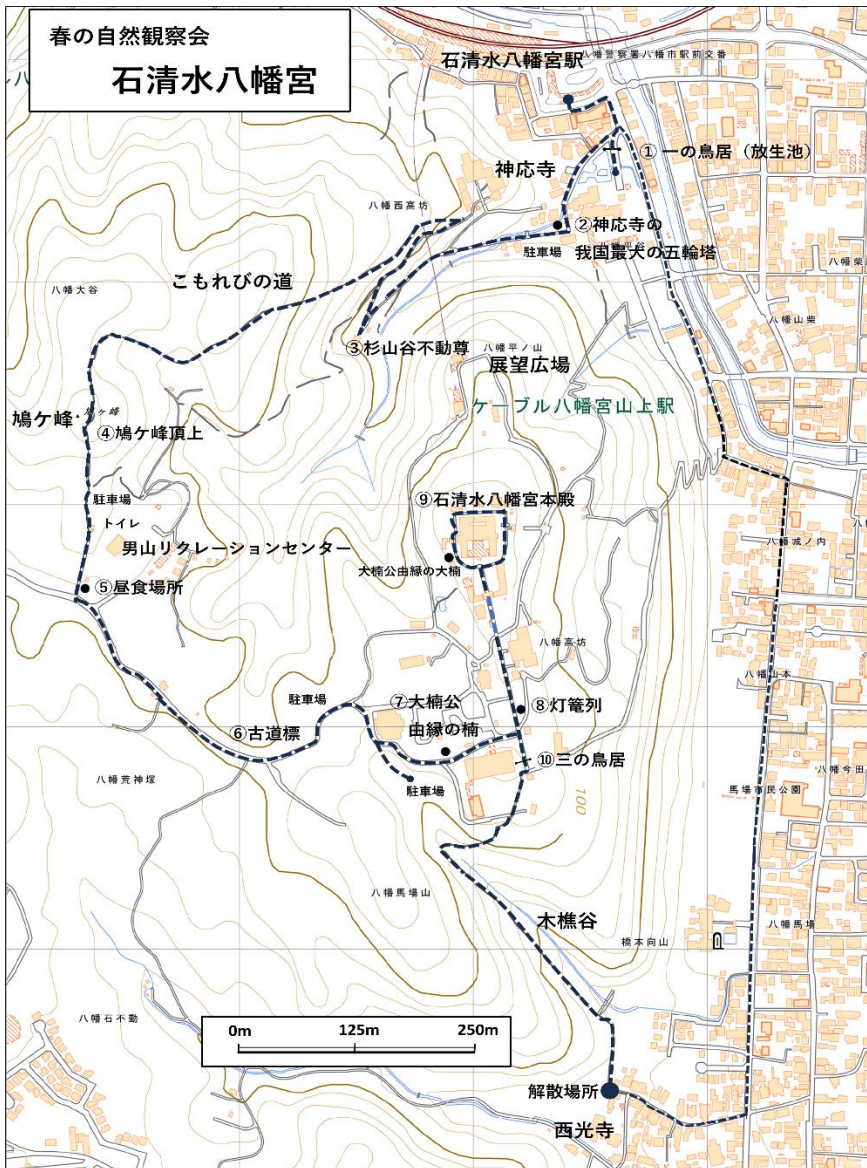
2026 府岳連自然保護委員会「春の自然観察会（男山、石清水八幡宮）」 開催報告

【日時】 5月10日（日） 晴れ

【参加者】 63名（自然保護委員14名、府岳連傘下山岳会会員37名、一般参加者12名）

【行程】 京阪岩清水新宮駅前(10:00)～(10:05)①一の鳥居前、朝礼(10:20)～②神応寺五輪塔～③杉山谷不動尊(10:50)～神応寺墓地(11:10)～(12:00)④山頂鳩ヶ峰(二等三角点「八幡」142.3m)～(12:15)⑤男山レクレーションセンター(13:00)～⑥道標～⑦大楠～⑧燈籠列～⑨石清水八幡宮本殿(13:40)～⑩三ノ鳥居(13:50)～⑪木樵谷～(14:25)⑫西光寺、解散

【行程図】



①一の鳥居（放生池）



②神応寺五輪塔



③杉山谷不動尊



④山頂 鳩ヶ峰



⑤屋食、男山レクレーションセンター



⑥道標



⑦大楠公由縁の楠



⑧灯篋列



⑨石清水八幡宮本殿



⑩三ノ鳥居



【概要】

素晴らしい五月晴れの観察日和となった。一般 12 名を含め全体で 63 名の参加者があった。主催者京都府山岳連盟の常務理事、駒井治雄氏より開催の挨拶を受け、本日の地歴担当杉村忠重、植物担当服部忠の両自然保護委員の紹介挨拶の後、一の鳥居にて地歴と池の植物の説明よりスタートした。当日資料にはない徒然草 52 段の仁和寺法師が麓の高良社を本殿と間違えた話など、ユニークな話題が飛び出す講師に期待する向きは多い。外来植物が蔓延する話や、植生の微妙な変化、スマレが草という日本の常識は世界の非常識など、また国宝本殿の秀吉が寄進した金箔塗りの樋など印象深い情報が多く、観察会が面白いものとなった。急きょアシストとして植物の解説いただいた京都山の会の石井氏に感謝申し上げる。樵谷の暗い谷ではシダ類の植生が見事で、絶滅危惧種も多く、都会近郊の低山でありながら豊かな自然が保持されていることに安ど感を覚える観察会となった。

【地歴報告】

担当：杉村忠重自然保護委員

「八幡男山観察会の地歴」

好天に恵まれ、まず「一の鳥居」前での案内から始めました。

山上の石清水八幡宮は、平安時代の 859 年に奈良、大安寺の僧、行教が宇佐八幡宮の神託を受け創建し、武運の神・八幡神が祀られています。八幡神は勇ましい武神として信仰されてきたため、「力強い山＝男山」と呼ばれるようになったという説があります。又、男山は都の裏鬼門(南西)にあたり裏鬼門を守る重要な位置にあります。鳥居の扁額は平安時代の三蹟の 1 人藤原行成の書体を参考にして江戸時代の僧侶、松花堂昭乗が作成したもの。松花堂と云えば、松花堂弁当を想起しますが、農家の種入れを松花堂昭乗が参考にして絵具入れを作り、それを見た「吉兆」の創業者湯木貞一が「松花堂弁当」としたものです。その他「徒然草」52 段には仁和寺の老僧が永年の夢がかなって、石清水八幡宮を参拝する為に一の鳥居、高良神社まで来たが、山頂の本殿には気付かず、帰ってしまった話などは有名です。石清水八幡宮は、武家の守護神としても大変重要でした。特に源頼義とその子源義家が八幡神を深く信仰したことで、八幡神は源氏の守護神として広まりました。義家は石清水八幡宮で元服したことから「八幡太郎義家」と呼ばれています。男山の山麓には神應寺があります。神應寺は平安時代に建立された寺で、石清水八幡宮の神宮寺(神社に付属する寺院)として発展しました。当時は神と仏が一体となって信仰される神仏習合の時代で、八幡神は仏の姿としても信仰されていました。

そのため男山は 山上：石清水八幡宮(神) 山麓：神應寺(仏) という形で、一体の信仰空間を形成していました。神應寺の境内には有名な神應寺五輪塔があります。五輪塔は鎌倉時代の石塔で、地・水・火・風・空 という仏教の五大思想を表す供養塔です。

この五輪塔は、鎌倉時代の有力者の供養塔ともいわれ、高さが6m横幅2.4mある重要文化財で、男山が武士や貴族の信仰の場であったことを物語っています。

杉山谷不動尊は、男山の山中にある不動明王を祀る霊場で、古くから修験者や参詣者の信仰を集めてきました。伝説によれば、昔この谷に霊験あらたかな清水が湧き、不動明王が姿を現したといわれます。山中で修行する山伏たちがこの場所を修行場として祈りを捧げたことから、不動尊が祀られるようになったと伝えられます。

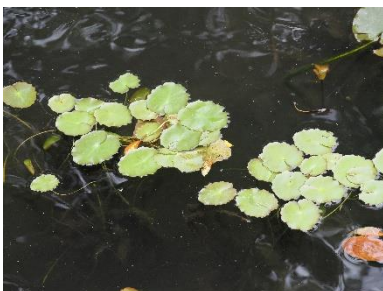
また、男山の鎮守である石清水八幡宮を守護する霊地の一つともされ、参詣者が道中の安全や無病息災を祈る場所でもありました。(レクレーションセンターで昼食後三の鳥居へ)三ノ鳥居は、男山の参詣道の途中にある重要な鳥居で、山上の石清水八幡宮へ向かう参詣の節目となる場所です。参詣道にはいくつかの鳥居が設けられ、麓から山上の社殿へと続く神聖な道を形づくっていました。三ノ鳥居はその中でも山上に近い場所にあり、参詣者はここで心を整えて最後の登りに向かったといわれます。かつてこの参詣道は、貴族や武士だけでなく庶民の参拝者でも賑わい、男山は信仰の山として多くの人々が行き交う場所でした。予定には無かったのですが南総門から八幡づくりの本殿まで、全員で入り楠正成の楠、信長塀、鬼門封じなども見ることが出来ました。残念ながら金の樋は外からはみられませんでした。歴史探索もできて良い観察会でした。

【植物観察】

担当:服部忠自然保護委員

①～④

- ・一の鳥居の池…アサザ、コウホネ、スイレンがひしめき合っている。特にスイレンは他を圧倒して池全体を覆いそう。コウホネは日本固有種、アサザは万葉植物と言われる絶滅危惧種。
- ・ロウバイの実…種は有毒(アルカロイド系のカリカンチンを含む)で、散歩中に犬や猫が食べ死ぬことがある。
- ・タラヨウ…はがきの木、葉裏に文字を書くと黒く浮き上がってくる。黄色い花は終わっていた。
- ・ヒメウツギとシャガの花観察。
- ・ヤマアイの群落…染料植物。万葉の時代より生葉の汁で衣類を染めた。草自体はサポニンを持ち有毒で不食。
- ・ナガバタチツボスミレ…根生葉は円形、茎葉は披針形。日本スミレの約八割はタチツボスミレ。海外には樹木製(木本)のスミレあり。



アサザ



ロウバイの実



ナガバタチツボスミレ



ウラシマソウ



カンサイタンポポ



トキワハゼ



ムラサキサギゴケ

- ・ウラシマソウ…近年、関西の低山でも増えてきた。ムロウテンナンショウが少なくなった?
- ・タンポポ…セイヨウタンポポと在来種のタンポポは花の下の総苞片が反る(セイヨウ)、反らない(在来種)で区別する。その他、セイヨウタンポポは一年中花が咲くが在来種は春だけであり、集合花の数も多い。関西の在来種はカンサイタンポポという。
- ・サギゴケ属の花…(ゴマノハグサ科)小さいトキワハゼと一回り大きいムラサキサギゴケ。



ツルニチニチソウ

ムラサキカタバミ

オッタチカタバミ

ヤブラン

- ・ツルニチニチソウ…外来種、キョウチクトウ科の常緑つる性植物。耐寒性に強く年中青々としているので園芸用に移入された。走枝茎をのばし根を張って広がり増えていくために、在来の植物を脅かしている。地域によっては特定外来種として駆除の対象になってきた。ミドリハカタカラクサも、同様に広がってきた。
- ・カタバミの仲間…オッタチカタバミは北アメリカ原産、1965年京都で発見。以来全国に広がる。ムラサキカタバミは南アメリカ原産、江戸時代に移入された。
- ・ヤブラン…常緑性の多年草、緑化や造園の植栽材料として広く利用されている。花は8~10月、実は黒い。似た草にリュウノヒゲがある。葉はもっと細い、実は青で葉の中にうずもれる。

④~⑪



ハゼノキ

ヤマウルシ

コシアブラ

ハルジオン

- ・ハゼノキ…ウルシ科。葉は先がとがって細い。ヤマウルシは葉は丸くなる。触るとまける。
- ・ハルジオン…蕾は頭を垂れる。茎は中は中空。葉は茎を抱く。ヒメジョオンは茎は隋があり、葉に葉柄がある。



左、コヒロハハナヤスリ
中、クルマシダ
右、フユノハナワラビ

- ・シダ三種…コヒロハハナヤスリとクルマシダは絶滅危惧集。

【参加者全員集合】

